

—— 家族の生活基盤及び就労形態の実態 ——

福山市立女短大 〇津川 淳 奥山清美 加納三子 三谷璋子
倉田美恵 土屋房江 鈴木雅子

目的 まず、家族の生活基盤を明らかにする方法として、分析①で、(職業)×[学歴]×(母親の就労状況)の3因子の組み合わせにより、最終的には9種類の特徴あるタイプを選出した。そして、この代表的なタイプを表わしていく方法として、職業で自営は(自)、ブルー・カラーは(ブ)、ホワイトカラーは(ホ)、とし、学歴で中卒以下は〔中〕、高卒は〔高〕、短大卒以上は〔大〕とし、母親の就労状況で共働きは(共)、パートは(パ)、無職は(無)として記号化した。

年令構成にみられる特徴は、(自)、(ホ)では、30代、40代、50代以上がほぼ等分されているのに対し、(ブ)では、20代、30代の若年層が全体的に多く、特に20代の占める割合がきわめて特徴的である。さらに、(ブ)―〔中〕では、20代、30代が(無)＜(共)＜(パ)の順に多く、(パ)がピークを形成していた。(ブ)―〔高〕では、(パ)＜(共)＜(無)と逆のパターンになっており、〔中〕よりは〔高〕の方がより高年令化していた。また、家族の収入状況は、(ブ)―〔中〕では(無)＜(共)＜(パ)のパターンで低収入層が多くなっていたのに対し、(ブ)―〔高〕では、(共)＜(パ)＜(無)とほぼ逆のパターンとなっていた。

次に、家族の就労形態を分析する方法として、分析②で、(家族形態)×[職業]×(母親の就労状況)の組み合わせにより、9種類のタイプを選出した。その結果、(無)＜(パ)＜(共)というパターンと、(パ)をピークとするパターンが、職業差、家族形態差として表われていることがわかった。